東邦学誌
第38巻第２号
2009年12月
論　文

幼児が知っている「からだ」

澤　田　節　子
古　市　久　子
八　幡　博　繁
加　藤　敦　子
山　崎　明日香

目　　次

はじめに
Ⅰ．調査の概要
　１．　調査の方法
　２．　調査の実際
Ⅱ．幼児が知っているからだ、知るからだ（結果）
　１．　からだについて知っていたこと
　２．　好きなからだの部位
　３．　主人公の好みとその選択理由
Ⅲ．幼児がもつからだのイメージを作るもの
　１．　身体について部分的な名称を知る身体知
　２．　幼児がからだを動かして知る体験知
　３．　絵本から得られる知識
　４．　周囲のおとなから聞き知った聞知
Ⅳ．子どものからだ教育を考える
　１．　幼稚園教育要領の領域『健康』との関連
　２．　保育園・幼稚園から小学校への連続性
　３．　からだに対する興味・関心を高める
Ⅴ．からだに関する学びのプログラム提案
おわりに

はじめに

自分のからだ[1)]のしくみや働きについての学びは、幼い頃より断片的に、家庭や学校で指導を受けてきているが、体系的なカリキュラムのもとになされているとはいえない。初等中等教育における健康教育は、教科保健（保健学習）を中核に生活科、保健体育などの関連教科や特別活動などで、それぞれの特質に応じて学んでいるのが実情である。しかし、子どもたちが自分のからだの変化について興味・関心を示し始めるのは、幼児期からである。なかでも幼児は、自分の身体の一部が傷つくのを極端に怖がり気遣う。ときに自覚症状が出たりケガなどをした場合には、泣いたりして大げさに反応する。それに子どもがもっているからだに関する特質は、病気・障害・体質や成長・発達にまつわる不安・悩みなど多種多様な内容がある。その特質一つひとつは、各発達段階に応じて、その時・その場の適切な対応が必要とされ、子どもはおとなの対処の仕方から学びを得ている。

幼児は、自分のからだのことをどのように知り始め、とらえているのか。幼児教育においてからだの教育は、どのようにされてきたのであろうか。実際の保育現場では、手洗いや歯磨き、トイレの習慣などの実行や、遊びのなかでからだを積極的に動かすようにしてきた。しかし、身体内部の仕組みや働きについては、きちんと教えるカリキュラムがないが、特に実践に加えて自然に学ぶものとして絵本からの学びが考えられる。日ごろから多く読まれている絵本は、知識を得ることのみならず、心の奥底に残り必要なとき、または関連することに出会ったとき、振り返りや活動の源になることもある。

本論文では、今まであまり触れられなかったからだに関する絵本を使用する方法について考えたい。絵本を使って自然にからだに対する興味・関心を高めることは、健康教育の有効なツールの一つになるのではないかと考えたからである。そこで、幼児たちが自分のからだのことをどれだけ知っているか、また、新しい知識をどのように取り入れていくかをとおして、これからの健康教育を考える資料とすることを目的とした。

絵本を選択した理由

柳田［1］は『砂漠でみつけた一冊の絵本』のなかで、「人生で三度読むべき絵本」といったキャッチフレーズで、とくに人生後半、老いを意識したり、病気をしたり、あるいは人生の起伏を振り返ったりするようになると、絵本から思いがけず新しい発見と言うべき深い意味を読み取ることが少なくないと、味わい深い言葉で推奨している。絵本については時々目にしていたが、人間のやさしさ・素晴らしさや生と死などについて、平易でしかも分かりやすく描かれており、再発見するに至ったのである。

また、佐々木［2］は、『絵本の心理学』のなかで「絵本作家たちの子どもをとらえる視点の深さ、子どもたちを人間として遇する眼差しの高さ、子どもたちが生み出す複雑な感情を的確に描写することの巧みさに感嘆した」と述べているように、絵本のよさを子どものみならずおとなも一緒に共有したいものである。これは心理学者の波多野寛治氏や河合隼雄氏が、児童文学や絵本に接近した動機と軌を一にするものである。

からだの絵本の主題は、特別な事件や状況を舞台に描いているのではなく、ごく普通の日常生活のなかのさりげないエピソードを幅広く取り上げている。筆者が特に興味・関心をもったのは、健康に関する絵本で、身体の仕組みや働き、病気や障害に関する内容のものがあり、からだを大切に考える視点で実に話としてうまく表現されていて、教材としても活用できると考えたからである。

絵本の出版及び先行研究

絵本は、世界中の子どもに読み継がれている。「子ども読書活動の推進に関する法律」の成立（2001年）後、積極的に図書の環境整備が推進され、どこの図書館でも所蔵冊数を増加させてきている。しかし、幼児向けのからだに関する絵本は、主題別になっているところが少なく蔵書は極少数であった。日本児童図書出版会［3］が推奨しているからだに関する絵本は、76件あり、幼児向けでみると、30件であった。なかでもからだ関係の絵本は、絵本作家・児童文学者の加古里子氏の「かこさとしのからだの本」［4］が代表的である。

からだに関する絵本を分類すると以下の５つに分けられる、①人体のしくみや働きについて語る本では、「顔・手・足・骨・血の話、うんち、おっぱい」など身体の部分の名称、排泄物などを扱った内容である。②子どもの病気について語っている本では、「ゲー・ピー、虫歯、かさぶたくん、兄弟姉妹が病気になったとき」など分かり易く説明している。③生命・生と死・生きること愛することについて語る本では、『葉っぱのフレディー』［5］、『わすれられないおくりもの』［6］などが代表的である。④身体についての古い文献に想いを得た本では『はらのなかのはらっぱ』［7］がある。⑤その他として「自分で支える命」や「身体がこわれる話」などがある。

絵本論については、『絵本論』『読む力を育てる』『子どもはどのように絵本を読むか』『絵本の力』［8］～［11］など、絵本についての意

義や読み方など多数の著作がある。また、論文では、１つの作品を取り上げ、解説を交えて論じているものが多くある。からだに関する論文として、保育園および幼稚園における絵本、紙芝居などを用いたプログラム「からだを知ろう」、「自分のからだを知ろう」は、身体の仕組みや働きの基本を学ぶものとして、５歳児が適切であった、としている［12・13］。しかし、からだに関して子どもの反応（短い言葉、うなずき、微笑、身体の動きなど）を取り上げて論じているものは、数が少なかった。

本論文で取り上げた２冊の絵本

（1）山本直英・片山健作［14］『からだっていいな』は、１日の流れに沿って、子どもたちが見たり、聞いたり、触れたり、痛かったり、かゆかったり、気持ちよかったりしている体験を、からだがあるからそうなる、という内容である。絵本にストーリー性は少ないが、普段の生活のなかで体験している状況を大胆な絵で表し、明確な文を添えており、心をゆさぶられ、子どもの心に響きやすい。作者は、からだ関係の絵本に力を注いでいる。

（2）ヘルメ・ハイネ作・絵、天沼春樹訳［15］『きみがしらない ひみつの三人』は、人が生まれ、死んでいくまでの一生を描いていて、頭（頭はかせ）、心（ハートおばさん）、栄養（胃袋おばさん）の三人の友達がやってきて、からだのなかで働き、成人し、やがて死を迎えるという物語である。作者のヘルメ・ハイネ氏は、ベルリン生まれで、自分の子どものために本を探していて、適切な絵本がないことがわかり、自分で絵本を創りだした人である。その後、絵本に専念し、ボローニヤ国際児童図書展グラフィック賞を受賞している。

絵本のうちからだに関するものは、内容的に客観的事実が描写され、心の動きが表現されにくいのではないかという印象もあるが、クイズ形式や疑問を投げかけ・問いかけなどで工夫が重ねられており、自然科学の知識も十分生かされている。

また、２冊の絵本については、事前に大学生に読んでもらい、その反応を参考にした。

Ⅰ．調査の概要

１．調査の方法

（1）対象：名古屋市Ｋ幼稚園　５歳児　70名（２クラス）

・Ｋ幼稚園の園児は、室内外において体全身で元気に遊び、さまざまなことに好奇心旺盛で、素敵な思い出をたくさん作っている。また、園長が幼児体育に関心が高く、健康への配慮が高い園である。

（2）調査時期：2009年７月

（3）調査手続き：絵本の読み聞かせの前後に幼児の反応を観察（言葉を聞き取る）する。ビデオで撮影し、後で分析する。

（4）方法：絵本の読み聞かせは、平常の保育時と同様にクラス担任が行った。

２クラス同じ絵本を使用し、具体的な方法はクラス担任に一任した。また、導入時と中間の気分転換は、自由に活用してもらうこととした。所要時間は50分ほどであるが、子どもたちの思う声を期待して、質問は最小限にし、日常子どもたちと接したことのない筆者らは、後方から観察者に徹した。

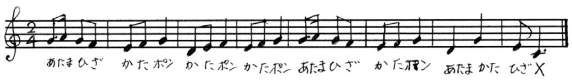
（5）倫理的配慮：幼稚園や園児の個人名は使用しないこと。施設長の了解を得てビデオを撮らしていただき、研究終了後、園に返すことにした。

２．調査の実際

導入：手遊びを行う

下記、楽譜のＸの箇所に、からだの名前を先生が言い、そこを触るもの。

幼児が『頭・肩・膝・ポン』で身体の各部を確認する。

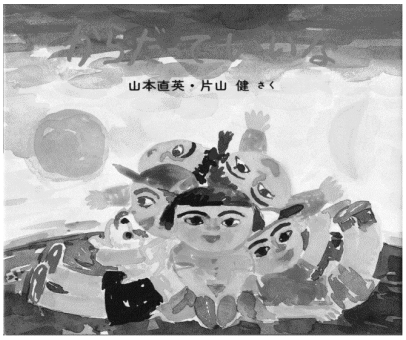


1) 知っているからだの調査

質問「どんな時にからだを使うか」：順番に聞いていく。

2) 知るからだの調査

(1) 絵本を読む：『からだっていいな』



質問１『からだっていいな』のなかで、からだのどこが好きかについて聞いていく。

中間：気分転換を兼ねる意味で、歌遊び・手遊びを行う。

内容：Ａクラス：遊び歌；お風呂に入る：手・頭・顔・背中を洗うなど。

Ｂクラス：歌遊び；ポケモン、アンパンマン、全員が大声で歌う。

(2) 絵本を読む：『きみがしらない ひみつの三人』「それは目で見えているものだけれど、みんなの「からだ」のなかは、どうなっているのか」の言葉かけ後に、絵本を読んでもらう。

質問２『きみがしらない ひみつの三人』について、三人の主人公（カード３種を見せて①頭はかせ、②ハートおばさん、③胃袋おじさん）のうち、誰が好きかを選んでもらう。（表４に示したカードの図、それぞれの絵をＡ４用紙に印刷）

質問３　選んだカード別に、それぞれの幼児に選んだ理由を聞いていく。

Ⅱ．幼児が知っているからだ、知るからだ（結果）

１．からだについて知っていたこと

からだをどんな時に使うか、使うと楽しいことについては、図１に示すとおりである。

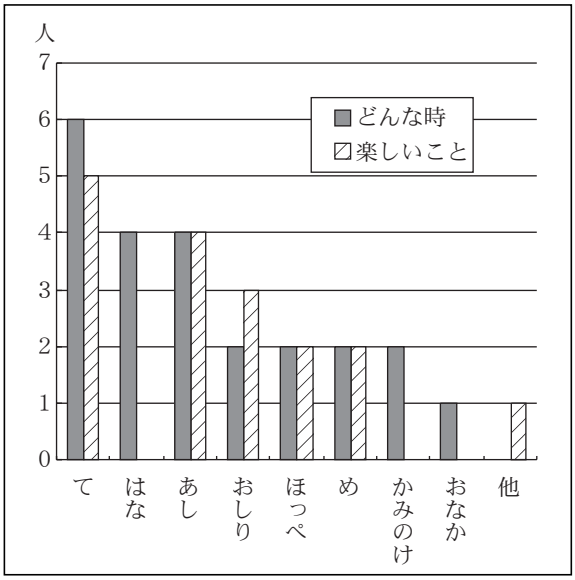


図１ からだをどんな時使うか、使うと楽しいこと

表１　からだをどんな時に使うか、使うと楽しいことの反応（Ａクラス）

（人数）

部　位	どんな時に使うか	使うと楽しいこと
て	砂遊び、泥んこ遊び、ご飯食べるとき、コマまわす、サッカーするときとめる、お絵かきするとき（6）	虫を採る、砂遊び、ドッジボール、鉄棒できる、キャッチボール（5）
はな	鼻をかむ、鼻血出す、息吸うとき、においをかぐとき（4）	―
あし	サッカーするとき、歩くとき、体操する、走る（4）	サッカー、スキップできる、走る、歩く、遊ぶのが好き（4）
おしり	うんちする、座るとき（2）	いやだ（ほとんどの子が大声で）、恥ずかしい、うんちする（3）
ほっぺ	ご飯食べる、かむかむ（2）	ふわふわ、きもちいい（女児ばかり）（2）
め	見るとき、友達を見る（2）	何も見えないから無いのはいや（女児）、まっくらが見える（2）
かみのけ	おしゃれするとき、シャンプーするとき（2）	―
おなか	ワニさんするとき（1）	―
他に好きなところ	―	弁慶の泣き所（男児）、転んだときに痛いけどすぐ泣き止むから（2）

表１はその詳細であり、図１はそれをまとめ、答えた数で示したものである。からだを「どんな時使うか」については、「て」が最も多い。その内容は「砂遊び」「泥んこ遊び」などであった。「使うと楽しいこと」も、「て」が多く、「虫を採る」「鉄棒できる」などであった。次に「はな」は、何に使うかは、「鼻をかむ」「鼻血出す」「息吸うとき」「においをかぐ」、「使うと楽しいこと」はない。そして、「あし」が各４つあった。その他「おしり」「ほっぺ」「め」「かみのけ」の順であった。

２．好きなからだの部位

(1)『からだっていいな』の頁ごとに聞きとった反応

幼児たちは先生の前に座って、絵本を読んでもらう。頁ごとに１～２人が声をあげているが、おとなしく静かにおはなしを聞いている。読み聞かせ時における幼児の反応は、表２のとおりである。最も反応が大きかったのは、絵本の17頁「入浴後の裸」の場面で気持ちよさを表したものである。絵をみて、恥ずかしいようで、「えー、あー、やっぱりいやだ」の声をあげ、笑っている。11頁「笑い」の場面では、笑い声があがり、にこにこと笑っている子が多くいた。また、言葉として反応があったのは、16頁「相撲とり」の場面で、「だれが勝ったかなあ」と「誰だか分からない、おかしいね」と一緒に笑った。そして、実際に身体が動いたのは、８頁「身体に触れる」場面で、隣の子をなでる子が４・５人出てくる。10頁「おねしょ」の場面で、「おもらしだ」という声を挙げて反応していた。

表２ 『からだっていいな』の読み聞かせ時における幼児の反応

頁	絵本の内容	幼児の反応（Ａクラス）	幼児の反応（Ｂクラス）
1	「からだっていいな」 （はじめに）	じっと注視する、絵が見たい、手を叩く、走ったり	はじめは手を叩く 全員が本を見ている
2	「目がさめた」・・太陽とともに	―	「太陽だ、太陽だ」と声があがる、大きな目が好きだよ
3	「木登り」・・世界が広がり気分がいい	―	―
4	「動物との触合」・・接触、鼓動が伝わる	―	―
5	「おならの話」・・身体は楽器、みんなのおなら	「えっ？」という声	「楽器だって」と笑っている子がいる、「父さんは大きい」とうなずく
6	「かけっこでケガ」・・包帯を巻く、こぶができた	―	「包帯だ、ぼくもこぶができたよ」という子がいる
7	「障害者との触れ合い」・・みんな一緒	「うた」の声、一人男児	―
8	「身体に触れる」・・手をつなぐ、なでる、触れる	ちょっとざわつく、隣の子どもをなでる子が４・５人	前の子を触っている
9	「暗がり、手をつなぐ」・・どきどきする	―	―
10	「おねしょ」・・こまるな、恥ずかしいよ	「おもらしだ」	お話が終ったとき、わあ、「おもらし」と笑っている
11	「笑い」・・笑いが止まらない、だれもが笑う	にこにこする子がいる	先生の声と一緒になって、何人かが笑う
12	「片足立ち」・・インチキする子	男児が大声で「アハハ」	「見てる、見てる」と、片目をつぶっている子もいた
13	「風のささやき」・・風の流れ、気持ちよさ	ちょっと横見する子がいる	―
14	「虫さされ」・・・嫌なこともある	「かゆいな」	「痛い、痛い」、僕も刺されたと腕を出している
15	「縄跳び」・・他人との比較でなく、自分のよいところが見えた	「ついていく」 「なわとび」	「縄跳びできるよ、とんだ、とべるよ」
16	「相撲とり」・・順番に負けていく、お父さんの気遣い	「誰が勝ったかなあ」 「お姉ちゃん」	誰が一番？「誰だか分からない、おかしいね」という声があがる
17	「入浴後の裸」・・気持ちよさ、裸の子、自由	「あー」「えー」、何人かが大声で「やっぱりいやだー」	裸だと絵をみて、笑っている、「おかしいよ」、「スッポンポン」
18	「自然のねむり」・・ねむくて、ねむくて	―	「うん、眠い」と上半身をゆらゆらさせている、「眠たい」
19	「からだっていいな」	「おわりじゃない」	「おわり」

表３　からだの部位と好きな理由（Bクラス）

部　位	好きな理由	人　数
くち	口が好き、しゃべれる、歌が歌える、食べれる	30
あし	ボールがけれる、足がばたばたできる、サッカーができる、走れる、足が大事だ、足が好きだ、歩けるから	25
て	遊べる、手をつなげる、手をあげる、両手をあげる	16
め	目がいい、見えるもん、みんなが見える、大きな目が好きだよ	9
あたま	頭で考える、脳があるから	2

(2) からだの好きな部分を聞き取った内容

絵本を読んだ後、からだの好きな部位とその理由は、表３のとおりである。最初に発言した子は、「め」が好きと言い。次が「あし」「て」の順であった。絵本のなかで最も多かったのが「くち」で30人だった。その理由は、「口が好き」「歌が歌える」「食べられる」などであった。次が「あし」で、25人の子どもが好きと反応し、「ボールがけれる」「サッカーができる」「走れる」「足が大事だ」などという声が挙がった。「て」は16人で、「遊べる」「手をつなげる」「両手をあげる」などであり、手足は動作を伴う言葉であった。「め」が９人、「あたま」が２人であった。

３．主人公の好みとその選択理由

(1)『きみがしらない ひみつの三人』の主人公の好み

絵本をみた後、主人公の３人がからだのどこに住んでいたかを聞いたところ、「頭はかせ」は両手で頭を指す。「ハートおばさん」は手で胸を指す、「胃袋おじさん」は、「おへそ」の辺りを指す。「頭はかせ」と「ハートおばさん」と声を発して場所を指すことができたが、「胃袋おじさん」は、どこかわからないという幼児が半数位みられた。

次は絵を見せて、どの人が好きか聞いたものである。３人の主人公で、最も多かったのは図２に示すように、「ハートおばさん」で、各クラス15人、全体で46％、なかでも女児が多かった。次が「頭はかせ」で、Aクラス10人、Bクラス12人、全体で33％、このなかでは男児が多かった。「胃袋おじさん」はAクラス６人、Bクラス８人、全体で21％であり、２クラスとも良く似た人数であった。そして、絵の場所に集まり、並ぶように声かけをした。その途中では、迷っている子が各クラスとも１～２人いたが、最終的にカードをもらっていった。

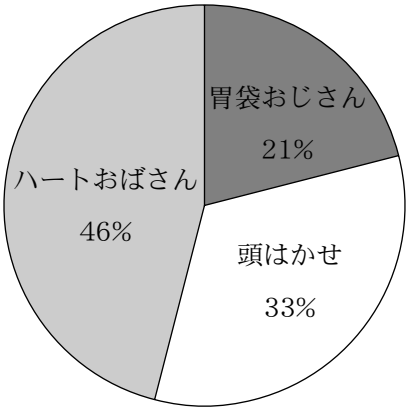
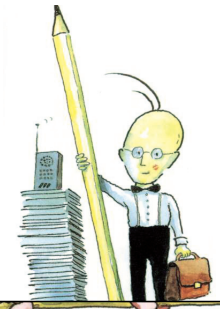


図2「きみがしらない ひみつの三人」のうち誰が好き

(2)『きみがしらない ひみつの三人』の「主人公」を選択した理由

幼児が主人公を選んだ理由については、表４のとおりである。「ハートおばさん」の理由を

表４ 『きみがしらない ひみつの三人』の主人公を選んだ理由

主人公	カードの図	選択理由（Aクラス）	選択理由（Bクラス）
ハートおばさん		・好きな子：15人 理由：ちゃんと心をきれいに片付けてくれる、泣いたときに心を乾かしてくれる、ハートおばさんは優しい、ピンクがいい	・好きな子：15人 理由：ハートが好き、かわいい、絵がきれい、色が好き、これが好きと絵をさす、みんなの気持ちを守ってくれる、大切にしてくれる
頭はかせ		・好きな子：10人 理由：夢をみると楽しい、考えるときにいる、見たものを残してくれる、工作するときにいる	・好きな子：12人 理由：頭が良くなる、勉強ができる、頭がいい、考えることができる、博士だ、黄色がいい、これだ頭がいい、鉛筆だ、みんなが覚えたことをカードにしまう
胃袋おじさん		・好きな子：６人 理由：ご飯を作ってくれる、冷たいものを熱くしてくれる、食べたものを胃袋で料理してくれる	・好きな子：８人 理由：守ってくれる、食べ物だもの、お腹を守ってくれる、理由はないがこれがいい、石を食べると首ところで出す、料理をしてくれる

みると、「心をきれいに片付けてくれる」「泣いたときに心を乾かしてくれる」「ハートおばさんは優しい」「かわいい」「色が好き」「みんなの気持ちを守ってくれる」など、ピンクの色で選んでいる子が多かった。次に「頭はかせ」の理由は、「夢をみると楽しい」「考えるときにいる」「見たものを残してくれる」「頭が良くなる」「勉強ができる」「黄色がいい」「鉛筆だ」などであった。「胃袋おじさん」の理由は、「ご飯を作ってくれる」「冷たいものを熱くしてくれる」「食べたものを胃袋で料理してくれる」「お腹を守ってくれる」「食べ物だもの」などという表現をしていた。

Ⅲ．幼児がもつからだのイメージを作るもの

調査の結果より、幼児がからだについて知っていること・知ることについて、①身体について部分的な名称を知る身体知、②幼児がからだを動かして知る体験知、③絵本から得られる知識、④周囲のおとなから聞き知った聞知の４点で検討する。

１．身体について部分的な名称を知る身体知

身体知の考え方について、無藤［16］は、「主体と対象との関係を身体の側からとらえることは、主体の心の働きを具体的な対象との関

わりにおける『動き』としてとらえ、運動などの場合のように、実際に体を使ってできるようになることを指す」としている。ここでは、子どもが遊びなどをとおして身体を使って知る「身体知」とする。

絵本をみる前に、からだの部位の名称を聞いたところ、すでに知っているのか、「手」とか「足」を始めとする9件の名称があげられた。そのなかで手、足、顔、頭に関するものが多かった。なかでも多かったのが手であった。

まさに、手を使う、手が使えるということは、人間の最も優れている現象のひとつであり、手が脳に直結していて、手を使うことで脳が活性化されることは周知の事実でもある。これは、幼児の手遊びだけでなく、子どもから高齢者まで手を使う活動が奨励されていることと一致するのである。特に日常生活のなかでの遊びは、手や足をよく使う「砂遊び」「泥遊び」「サッカー」「ドッチボール」「体操」といったものが多く挙げられ、これらをとおして、子どもたちは自分のからだを使ってからだを認識していくものと考えられる。

続いての質問で「使うと楽しいこと」のなかで、「手」や「足」はもちろんであるが、「おしり」は、恥ずかしいと言いつつ「うんちする」を挙げていて、排泄してすっきりするという実感がそのまま表現されている。身体はどの部分も平等であるはずだし、十分知識がない子どもにとって同じ価値であるはずなのに、「恥ずかしい」という感情をすでにもっている。これは今までの生活体験のなかで培われた体験知であろう。また「ほっぺ」では「ふあふあ、気持ちいい」と女児がいう。これらの表現は、子どもが直に知る感覚であり、そのことを言葉に置きかえるという、かかわりの時間を通して作り上げられたイメージの言語化がなされたことになる。その言語化は子どもにとって、身体のもつ感性を意識化させ、身体の大事さを実感することにつながっていくのではないか。

『からだっていいな』を読んだ後の幼児の反応では、「口」が多く、続いて「手」「足」「顔」であった。まさに幼児たちはおとなのように、すばらしいとか感動したとは言えないが、無意識のうちに好きな絵を選びとっているのであろう。ワトソンが「絵本には、絵に込められた意味を発見することに大きな喜びがあり、絵を読むことでは天才的である幼い子どもがそのことをよくなしえている」[17] と述べているように、幼児たちは色鮮やかに描かれた口や目の絵を見て、大きな声を出して反応していたことが伺える。このことが好きな感情につながり、からだの好きな部位にも波及したものと思われる。

次にからだの部位で好きな理由は、短い言葉ではあるが、「ボールがけれる」「足がバタバタできる」「手をつなぐ」「手を挙げる」というように動作を伴う表現が多くみられる。絵本の場面には、「縄跳び」や「かけっこ」が出てきているが、「ボールけり」や「サッカー」というのはない。しかし、幼児たちの反応は、からだを動かすことから同じような遊びが連想されているのであろう。また、絵本のなかには、手遊びそのものはみられないが、特徴的な腕が描かれていたことから、手をつないだり、手を上げたりしている言葉が飛び出し、その理由となっているのである。

日本人はよく手を使うことを文化的視点で、大築 [18] が『手の日本人、足の西欧人』で証明している。また、手足を活動させ覚えていくこと、つまり、身体で覚えることは、脳で覚えることにほかならない。幼児たちが、身体を使って知る身体知というのは、脳そのものに影響を与え、その感覚と共に言葉の意味も蓄積されていくのであろう。

2．幼児がからだを動かして知る体験知

幼児が見たり・聞いたり・試したりして実際に体験するなかで、あるストーリー性をもって自分でからだを動かし、そこには心の動きも大きくかかわってくることを「体験知」とする。体験知と身体知との違いは、繰り返し行われる行為において、体験知の方をより長いスパンで考えている。そこにはより多くの心の働きがあり、試行錯誤があり、いろいろな感情を伴い、人としての総合的な枠組みをもつものとする。

幼児期には、体験・経験が脳を育てることについて、寺沢［19］は『子どもの脳は蝕まれている』のなかで、「具体的に手足を使う運動が経験・体験であり、（四肢）運動を伴い、繰り返すことによって、しっかりと脳に記憶として刻み込まれていく」というように、自分のからだで行動したことにより、直接実感できる体験知そのものである。

『からだっていいな』の読み聞かせ時における反応で、「からだに触れる」場面で、隣の子をなでる子が４・５人出ている。まさに、幼児が自分のからだで行動し、気持ちいいねと実感的に体験しているのである。作者は、からだ関係や性教育に力を注いでおり、本文中でも、「自分でくすぐっても　くすぐったくないのに、だれかにくすぐられると くすぐったくてたまらない」という言葉で、肌と肌の触れ合いを絵本全体で表現している。幼児たちはすぐ隣の子をなでていたが、これは、人間がもっている模倣本能ともいえるものであり、絵本のように触れてみて、その快さを実感してみたかったのであろう。

また、『きみがしらない ひみつの三人』の絵の選択理由を、小松崎ら［20］の意見を参考に、以下の４つに区分したのが表５である（一部改変）。①「遊び感覚で無条件に楽しい絵」は、楽しいことがキーワードであること、②「文を説明している絵」は、絵本の絵と文章の一体化が条件であること、③「親しめる主人公がいて分かりやすい絵」は、それぞれの特徴をもった主人公がいること、④「絵の面白さをお互いに通じ合える絵」は、絵の面白さがあり、主人公

表５ 『きみがしらない ひみつの三人』の好きな絵の選択理由

区　分	頭はかせ	ハートおばさん	胃袋おじさん
①遊び感覚で無条件に楽しい絵	黄色がいい、頭がいい、勉強ができる、夢を見ると楽しい	絵がきれい、色が好き、ピンクがいい	—
②文を説明している絵	あたまがよくなる、みんなが覚えたことをカードにしまう、工作をするときにいる	—	—
③親しめる主人公がいて分かりやすい絵	博士だ、見たものを残してくれる	気持ちを守ってくれる、大切にしてくれる、泣いたときに心を乾かしてくれる	ご飯を作ってくれる、冷たいものを熱くしてくれる、守ってくれる、食べものを胃袋で料理してくれる
④絵の面白さをお互いに通じ合える絵	鉛筆だ	これが好きと絵をさす、絵が好き	食べ物だもの、理由はないがこれがいい

と通じ合えること、とした。

まず、「頭はかせ」は、①～④で、①「黄色がいい」「夢を見ると楽しい」と遊び感覚で選んでいる。そして②では、「みんなが覚えたことをカードにしまう」「工作するときにいる」という表現をして、体験したことが記憶として残っており、それが選択する際のキーワードとして行動に表れたのであろう。

「ハートおばさん」は、①、③、④で、「絵がきれい」「色が好き」「ピンクがいい」などで絵の面白さ・楽しさが表現されている。それに③では、「気持ちを守ってくれる」「大切にしてくれる」「泣いたとき心を乾かしてくれる」と、実に巧みな表現をし、美しいハートの絵に心を動かされていたようである。暖かい気持ちに関する答は、自分が困ったとき、周囲から暖かくしてもらったことが、この選択につながったと思われる。

「胃袋おじさん」は、③と④で、胃の働きを具体的に示しているが、幼児にとって「よく噛んで」とか「うんち」ということは良く知っているが、胃袋そのものについては遠い存在であったかもしれない。この表現は、「ご飯を作ってくれる」「料理をしてくれる」など、食事に関連した言葉で、「～してくれる」と、胃の働きを知った一コマではないかと考える。

ワトソン［21］は、「絵本の世界が子どもにとって、自分の生活と地続きであることを意味します」と述べているように、日常生活に根ざした日々の体験から出てきていることがうかがえる。つまり、幼児の学びは、自分のからだを使って実際に体験している事柄が、一番身に付いていくものと考えられる。

3．絵本から得られる知識

絵本の読み聞かせ時は、時々特徴的な反応がみられる。松居［22］は『絵本のよろこび』のなかで、「絵本は、それを読んでもらったときに、聴き手の子どもが想像するのです。子どもは絵本を読んでもらったとき、耳で聞く文章と、まったく同時に目で読み取る挿絵とにより、想像力を懸命に働かせて物語の世界を思い描きます」という。まさしく絵本の読み聞かせは、絵と文とが一体化し、物語が想像されていくのである。絵本の絵が特徴的で、特に目と口が語りかけるように動的で強い印象を受ける。それは多くの言葉でいうよりも、幼児たちには「知る」ことにつながったものと考えられる。

『からだっていいな』の幼児の反応について、小松崎ら［23］の意見を参考に、①絵に対する反応、②言葉に対する反応、③話に対する反応、④絵本から生まれ、発展した子どもの行為、⑤他の絵本との関連、⑥特になし、の６つに分類したものが表６である。教師が読み聞かせをしているときは、座って耳を澄まし、聞き入る子どもたちなのである。その過程では、絵本の絵や言葉に対して、思わず声を出したり、絵のまねをしたりする動作をしている。その幼児たちの笑顔やしぐさは、和やかなクラスの雰囲気が感じられる。

幼児の反応が最も多かったのは、①の「絵に対する反応」で、入浴後の気持ちよさは、幼児も実感的に分かるのか。裸の絵が恥ずかしいようで、「えー、あー、やだー」と言いつつ、面

表６　『からだっていいな』の幼児の反応

分　　類	幼児の反応 （絵本の頁）
①絵に対する反応	2, 12, 13, 15, 17
②言葉に対する反応	5，6，7
③話に対する反応	10, 11, 16
④発展した子どもの行為	8, 14, 18
⑤他の絵本との関連	1，9
⑥特に反応なし	3，4，9

白いのであろう。次が②、③、④であり、なかでも「話に対する反応」で、教師の話し方や言葉が巧みであったこともあり、「笑い声があがり、おかしいよ」という反応である。クラスの友達と一緒に笑う時間がもてたことは、脳を活性化させ、ゆとりをもたらしたものと思われる。また、「相撲とり」の場面でも、「だれが勝ったかなあ」と考えるときである。この場面は、話を聞いていないと分からないし、少し考える必要があるが、「わからない」といって一緒に笑っている。

最後に「特に反応なし」の場面では、「まっくらやみでてをつなぐ、だれがだれだかわからない。おとこのこかな　おんなのこかな　なんだかちょっとドキドキするな」の文とともに、ほとんど暗い絵がある。その頁は、「暗がり」で想像ができにくかったかもしれない。他の「木登り」と「動物との触れ合い」の２場面もそうである。ここは絵を見ながら聞こえてくる言葉の気持ちよさが伝わり、幼児たちの想像力に任せる方がよいと考える。幼児たちの思わず出した声やしぐさは、絵本の世界から自由に出入りして、自分の生活と結びついて、既に一体化していたものと思われる。子どもは絵本を読んでもらったとき、言葉と同時に目で読みとる挿絵から、想像力をごく自然に働かせて物語を思い描いていると思われる。

そう考えると、読み方も大切である。昨今は、絵本が普及し、待合室などでも絵本を読んでもらっている姿をよくみかける。そんなとき、子どもが細かい絵を指して聞いているのに、母親は字を追って、字の意味を懸命に教えているのである。絵本の意味するものが理解されていないと、絵本の楽しみや想像性を絶ってしまうこともあるのではないか。これに関連し、瀬田［24］は『絵本論』のなかで、「子どもの絵本について、よく本を読むと字をおぼえるとか、論理をよくのみこむとか、いろいろのためになる点を数え立てる人たちがありますが、子どもにとって本の功徳は、物語自体でみせるふしぎな世界にわれを忘れて、わくわくさせられるあのたのしみのほかに、何があげられよう」と、説いている。

また、『からだっていいな』のなかで、「おねしょ」や「裸の子」の場面があるが、前述の理由から、あえて注釈を加えない方がよいかもしれない。宮地［25］は、幼児期に読んでもらった作品で、そのときは分らなかったものでも、「青春時代にああそういう意味だったのかとわかる」という。また、田島［26］も『しばてん』のあとがきに「青年になってからでも、この絵本が心のなかで発酵して・・・」と秘かに心のなかでの育ちを期待しているが、絵本を使うときは、このこと、つまり、いつか気づいてくれることを想定することが可能なのである。

絵本の『きみがしらない ひみつの三人』のなかの最後の場面では「きみがのこした　愛をみつめて、みんなの心に　きざんでくれる。みんなが　きみをわすれないようにいつまでも」という言葉で結び、生命のつながりを教えてくれている。

保育現場においても、本の難しい・易しいをおとなの感覚を頼らず、「絵本を選ぶ先生が、どのような価値を大切にしているか」ということを考えると、筆者らが幼児たちに伝えたかった価値観は、間違いではないと考える。

子どもたちは、絵本から単なる知識や知恵以上に想像的な事柄をも学んでいるのである。子どもがおとなになる過程では、からだが基盤になって起こる身体的な苦痛や悩み・葛藤に遭遇することがある。そのときを見越して描かれた絵本を提供できるようにしておきたいものである。

4．周囲のおとなから聞き知った聞知

子どもたちは、家庭や幼稚園などあらゆる人や場所から、沢山の言葉をシャワーのように浴びて、日々学びを増加させている。まさに、子どもたちは、周囲の人々から言葉や態度を見たり、聞いたり、肌に触れて感じたりして聞き知っていくのである。人間にとって、耳新しい（目新しい）言葉や態度は、少なからず心に残る。時実［27］が述べているように、「人間は『たくましく』『うまく』、そして『よく』生きてゆく」ものであろう。つまり、人間には、本来的に本能に近いものがあり、それが具体的な事柄を実践しようとアンテナをはっている。したがって、子どもは、よりよく生きるために、必要なものに対して敏感に察知していくのではないかと思われるのである。

人は、胎内にいる時から心臓の音を聞き、言葉を発する前まで、周囲の人たちの音や声を十分に聞いているのである。例えば、「どんな時からだを使うか」の質問をしたとき、「弁慶のなき所」という幼児がいた。それはどこですか、と問われても応えられなかったが、音声として強く心に残っていたものと思われる。ここで先生が丁寧に説明を加えたのは、適切なアドバイスであったと考える。

また、『からだっていいな』の読み聞かせ中、「おねしょ」の場面でも話が終わった後、「おもらし」という声を上げて反応していた。この「おもらし」という言葉は、絵本のなかには出てきていないが、言葉の獲得を修了していることを示す結果であろう。また、からだの部位で好きな理由をみると、「足が大事だ」や「頭で考える」「脳があるから」などという言葉が注目されなければならない。頭という部位からこの言葉が想像されているのは、周囲のおとなから聞き知ったことであるといえよう。

そして『きみがしらない ひみつの三人』の「頭はかせ」では、「頭がよくなる」、「頭がいい」「勉強ができる」という言葉を使っているのである。絵本のなかでは、「頭がよくなる」とはどこにもないが、ここでも同じことがいえる。遊び感覚で表現しているとはいえ、５歳児は既に、おとなが使っている言葉を発しているが、概ねその意味内容を汲み取っているようにも思われる。子どもは、言葉の意味が分からなくとも見たり、聞いたり、触れたりを繰り返すことにより、自然に覚えていくようである。

子どもは自分で育っていく力をもっていることから、ときには見守り、ときには沢山の言葉を発して一緒にからだを動かすことができるような、育ち環境を整備しておくことが肝要であろう。

ただ、それらが即物的に反応し、インパクトのあるものとして感得されても、少し時間が過ぎてしまうと感得されたものが消え失せて、からだ自身が即物的に反応しなくなってしまう。そのため、種々の体験をリピートさせることによって呼び起こし、子どもの聞知を豊富な内容にしていくことが必要不可欠であると考える。

Ⅳ．子どものからだ教育を考える

1．幼稚園教育要領の領域『健康』との関連［28］

教育要領では、領域『健康』において「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」とし、「ねらい」と「内容」を以下のように示している。

(1) ねらい

①明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。②自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。③健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

(2) 内容

①先生や友人と触れ合い、安定感をもって行

動する。②いろいろな遊びのなかで十分に体を動かす。③進んで戸外で遊ぶ。④様々な活動に親しみ楽しんで取り組む。⑤先生や友人と食べることを楽しむ。⑥健康な生活のリズムを身に付ける。⑦身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄等の生活に必要な活動を自分でする。⑧幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。⑨自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。⑩危険な場所、危険な遊び、災害などの行動の仕方が分かり、安全に気をつけて行動する。以上10項目の内容が挙げられている。

ここでは「からだ」そのものについての具体的な指示はされていない。しかし、本論文で前述したからだの４つの知である「身体知」「体験知」「絵本の知識」「聞知」については、それに近いものが挙げられている。このことから、現場に任されている部分については、保育者の感性や知識・技能に依存しているのである。現在多くの研修会があり、それに参加する保育者の多さは、その必要性を示しているのであろう。

教育要領の領域『言葉』において、本論文に関係する箇所のみあげると、(1)「ねらい」では、③「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生と友達と心を通わせる」としている。(2)「内容」については、⑤生活の中で必要な言葉が分かり、使う。⑧いろいろな体験を通して、イメージや言葉を豊かにする、などがある。(3)「内容の取り扱い」の中では、③絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、創造をめぐらせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること、とされている。

本論文では、絵本という手段が、からだという物質でありながら、自分の経験と結びつけて、『きみがしらない ひみつの三人』のなかに出てくる「ハートおばさん」が、心の傷を癒してくれることまでも理解できたことで、もっとからだについての絵本が導入されてもいいのではないかと考える。

2．保育園･幼稚園から小学校への連続性

子どもの健康な心とからだを育てるには、保育園･幼稚園から小学校へのつながりが重要であると考え、小学校の保健学習を参考にする。学習指導要領では「学校における体育・健康に関する指導は、児童（生徒）の発達段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする」としている［29］。小学校の保健学習は、３学年～６学年で24時間程度、教科「体育」の「保健領域」で計画されているが、１学年・２学年にはない。

このように保健学習は、子どもの発達段階に応じて実施されているが、近年、子どもたちの身長・体重などの体格が向上するとともに、性的な成熟も早まってきていることから、からだに関する教育の方が、遅れているように思われる。そのため、子どもが興味・関心を示し始めた段階から、からだの不思議さや素晴らしさ、そして健康に関する話題を豊富に与えていくことが必要ではないか。

2009年の春から現在、世界的に新型インフルエンザの流行で、保育園･幼稚園、学校などで集団感染が発生し、学級閉鎖や休校が増加している実態が続いている現状である。保健学習の健康や病気に関する教育を突発的・断片的に教えるのではなく、計画的・段階的に配置していく必要があると思われる。幼稚園・小学校低学年の段階から、人体のしくみや働き、病気の予防、性教育など、健康に関する基本的な知識・技術の理解ができるように指導していくこ

とが重要であると考える。

保健学習に関連して、『からだっていいな』を読んだ大学生の感想（参考資料）をみると、からだ全体に目を向け、自分自身のこととして捉え、新しい発見をしたと述べている。なかでも多かったのは、おとなになると人前で表現できない「おなら」の話、次が「身体に触れる」であった。この本は、絵のユニークさと共にからだに関する言語が、分かりやすく表現されていることから、子どもたちにも伝えたいというものである。まさに、彼らは、からだに関する内容について、恥ずかしがらずに子どもに伝えていくことの大切さを学んでいる。

また、自分の子ども時代を思い出し、ベッドに臥せていたときに、痛いところをさすってもらった感触が甦り、心が穏やかになったことが想像されていたのではないか。教育要領に掲載されている「ねらい」を達成するためにも、教育プログラムのなかにからだに関する内容が取り入れられることを願っている。

3．からだに対する興味・関心を高める

(1) からだを使う生活

文化的な生活が身体を蝕んでいる話は、20年以上も前からなされている。寺沢［30］は「日本の子どもの遊びが動的なものから静的なものに移行したことと、テレビの視聴時間が長いことの二点が、じつは子どもの脳にたいへん厳しい状況を作り出していることがわかってきます。日本の子どもの遊びが静的で動かなくなることから、筋肉を動かさなくなります。」・・中略・・また、その理由として「子どもたちはコミュニティーを作らず、複雑なコミュニケーションをしなくなる、ひいては脳を動かさなくなるのではないかという可能性に気づきます」というように、からだ本体への影響が大きいと警鐘を発している。そのため、あらゆる機会を使ってからだを使うことへの関心を高めることが必要である。

例えば、人は、誰かのために何かをすると、自分もうれしくなり、達成すればやりがいを感ずるものである。身近なお手伝いについて考えてみると、幼児のお手伝いとして、食器並べや後片付け、洗濯物を畳む、ゴミを捨てるなど。小学生ならば、台所の手伝い、風呂洗い、布団敷き、ズック洗いなど。中学生になるまでには、自分の食事が作れる位にお手伝いをしてもよいと考える。お手伝いは、からだを動かすと共に生活する術を身につけることでもあり、毎日の積み重ねのなかで、意外と要領を覚えていくものである。

子どもがする物事は、最初、上手く出来なくともやらせなくてはできない、まさに、お手伝いは、実践しているうちに、手と頭を使い要領がよくなり、物事をやりとげる段取りがよくなるものである。昨今は、少子化で親が全部やってしまい、生活常識が身についていない子も多くいる。大学に入り一人暮らしを始めて、何もできないことに気づき、日常の些細なことができなく、戸惑っている人も沢山いるようである。つまり、幼児期から簡単にできるお手伝いをさせることは、自立心を高めることにつながるのである。

人生80年のうち子育てとして関わるのは、生後10数年余りである。子どもが人として生きていくための基盤となる躾に合わせて、健康に関することや家事などの生活術を指導し、自律できるように体験知を豊かにしていくことが必須であろう。

(2) からだを使った対話

からだを使い、経験を豊かにするプロセスで、子ども自身の学びに依存するだけではなく、対話を通してなされることが望ましい。ゆっくりと繰り返し、言葉を交わす対話が、子どもの知

を育て、からだを大切にする知恵も伝えていくことができる。単に知識の切り売りや請け合いではない、心の交流として行いたい。

家庭での絵本の読み聞かせもそのひとつであろう。松居［31］は、『絵本のよろこび』のなかで、「大切なことは、読み手と聞き手とが、“共に居る”ということです。お母さんの側にくっついて、あるいはお父さんの膝に座って、顔を寄せ合いながら、その人の声で物語が語られ、いっしょに挿絵を見ることは、子どもにとって変えられぬ至福のときです」と述べているように、ここに絵本体験の原点があるように思われる。しかし、おとな社会は忙しく、絵本の必要性が理解できていても時間がとれない実情もあろう。毎日絵本を読むという義務感ではなく、折りにふれ、からだに関する特別なメニューを取り入れ、成長発達の喜びを含めて語ってもらいたいものである。

東京新聞「本がつくるコミュニケーション」のなかで、ある調査によると、「大人は子どもに対し、１日で無意識のうちに二百近い否定語を浴びせているそうである。早く起きなさい、何しているの、宿題は、全くもうあんたは・・」というように、ダメだダメだと否定されて育っては、否定的なおとなになってしまう［32］。逆に人は、ほめられればうれしいし、もっと頑張ろうと思うものである。例えば、子どもが風邪をひいて苦しみ始めているときに、「夜遅くまでテレビを見ていたから」とか「布団を着ていなかったから」と、原因追求や否定的な言葉を使わないことを心がけることだけでも大きな一歩ではないか。このような非日常的事態に陥ったときをチャンスと捉え、対話を深めてもらいたいものである。

(3) からだに関する保育所・幼稚園での学び

『からだっていいな』の絵本は、17場面あり、そのなかでお友達と共にからだで体験した場面が８場面、自分への問いかけが７場面、家族が関わっている場面が２場面となっている。本の内容は、手足を活用した絵が豊富にあり、それに言葉が添えられ、自然に「からだ」を動かしたくなるような構成になっている。特徴的な場面としては、友達との触れ合い、身体に触れる、排泄の失敗、相撲とり、おとなの気遣いといった内容がある。これらに対して、幼児が発した短い言葉や態度で表したものを論拠としているが、絵本に託して語った内容を十分に汲み取っているかどうかは計られていない。けれども、いつか幼児たちが絵本の意味するものを理解できるときがくるものと確信している。

昨今は、子どもたちが、楽しく夢を膨らませて、というだけでは生きられない時代である。柳田［33］は、「平和な時代ではあるが、震災死、水害死、事故死、がんなどによる病死などあまりにも過酷で悲しいことが起こる。これらは、おとなでも同様でこうした辛く悲しい体験をどう受け止めるか、どのように対処してゆけばよいかなど学んできていないのが実態である」と、実感を込めて訴えている。この点に関しては同感であり、死生学とまでいかなくとも、子どもたちにも「生と死」「生きること」「人生」といった、あえて重たいテーマも、時には実感的・体験的に加えていく必要がある。

近年の絵本の出版状況からみると、からだに関する幼児向けのものは少ない。でも自然科学分野での絵本は、数学や理科といったものや小動物が介在した内容のものが多く出ている。絵本を「からだ」に限定してしまうと数が限られてしまうので、「生と死」を扱ったものや小動物との対話やストーリー性のあるものが効果的であろう。それに保育園・幼稚園などクラス活動の利点としては、疑問に思ったことを友達と話し合ったり、先生に聞いたりできるのは、多くの子どもが集まる集団でないと活力は生まれ

ない。これこそが子どもの体験知となるものである。

Ⅴ．からだに関する学びのプログラム提案

絵本の読み聞かせを終えて、幼児たちの反応からみえてきた学びについて、次のようなプログラムの再確認をしておきたい。

(1) 絵本を使った学びをとりあげる

子ども期は、絵本の時代といわれている。松岡［34］は、その著『えほんのせかい こどものせかい』のなかで「幼児の時代は、絵でものを考える時代です」というように、絵本から受ける感動や知識が多い。この機会に、からだに関する絵本を幼児期から、意識的に取り入れてほしいと願う。幼児は、遊びが生活であり種々の遊びをとおして、自分の身体の部位の名称や働きを学んでいく。ときに子どもは、遊んでいてケガをし、痛みを実感的に知ることもある。また、熱や咳がでたときなど自分のからだの異変に気づき、病気の怖さを同時に体験しながら成長していくのである。

これに関連して、正高［35］は、「アメリカの動物学者ガルシアが、サルに嘔吐剤を混入したアーモンドを使って実験した結果から発見した生物の法則」を紹介している。それは、「身体に関する体験は、一回きりの経験で学習が形成され、しかも効力が半永久とはいかないまでも長期にわたって持続する」という。要するに、自分の身体で得た苦い体験は、からだに染み付いてしまうようである。人は、幼児期に軽い病気や小さなケガを経験しながら成長し、予防法や対処の仕方をおとなから学んでいるのである。しかし、昨今は、保護者が子どものケガや病気に対し、過敏に反応してしまうことがあるが、体験そのものを学習の機会と捉えてほしいものである。

(2) 言葉を添えながら身体に触れて育てる

本論文で取り上げている『からだっていいな』のなかで、それまで比較的静かに聞いていた幼児たちが、ちょっとざわつき、前の子や隣の子に触れているのである。幼児たちは、絵を見て、言葉を聞いているなかで、自然に手が伸び確認しながら快感を得ていたのではないかと推測される。

子どもと接触するときには、丁寧に言葉かけをしていく。家庭のなかでの親子の触れ合いの指導をしていく必要がある。赤ちゃん期には、指示語のみでなく、触れ合いを楽しく、言葉を多くかけること。例えば、おむつを替えるときにはおなかをやさしくたたいて「ポンポンポン」と声かけをすることで、からだの快感を得る。

幼児期においても、耳から入ってくる気持ちよい響きが心身ともに快感と結びつくように、からだの体験を大切に考えてほしい。言葉が広がると対人関係が飛躍的に増す。言葉は自分の世界を広げるとともに周囲との共感を呼ぶ。そのことがお互いのからだを労わり合う心に通じる。

(3) 遊びで手足を十分に使う機会をもつこと

子どもが自分の手足を使い、からだを動かす遊びはどの施設でも十分になされていると思われる。最近では、幼児体育指導者を講師に招いて指導をしている施設もある。子どもには自由な遊びで快感を体験させることが重要である。幼児がからだを動かして体験する要因として、小林ら［36］は、５つの視点を挙げている。①体を動かす心地よさ、②いろいろな体の動き、巧みな動き、③自分の体への気づき、④みんなと一緒の楽しみ、⑤保護者のスポーツライフである。以上のように、子どもがからだを動かすことができるように、保護者をも巻き込み一緒に運動できるプログラムを用意しているところ

も多くなってきた。

けれども、子どもがからだを動かし快感を味わうのは、計画的なプログラム内容ばかりでなく、何らかの環境があれば、自分から遊びを創り出すこともできることを忘れてはいけない。それが昨今は遊び場が少なく、しかも遊びの内容が変化していることから、意識的に大地を踏みつけて飛び回ることができるような環境や仕組みを取り入れていく必要があろう。

(4) 今、幼児期に必要なことは、からだを使っての体験知

子どもの五感をフルに使って、ストーリー性のある体験をさせるための工夫が、これからは必要になってくる。その五感である視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚だけでなく、ルソーがその著『エミール』[37] のなかで述べている「第六感」ともいうべき、あらゆる総合によって、物事の性質を教えてくれる共通感覚である。加えて、正木 [38] は、「第七感」をフル回転させる環境を作ることであるという。この感覚は、筋肉感覚とか、自己感覚というもので、手で触れ、耳で聞き、目で見て判断し、足で歩く機会を多くすることである、と述べている。これらの感覚は、子どもの遊びに代表されるからだを使い込むことから得られることは言うまでもない。

以上の４点はあたりまえのようにも思えるが、上記（2）は施策として、大阪市が今年度より取り組み始めた程度で、施策が届きにくい家庭のあり方を含んでいるので、今まで放置されてきた事柄でもある。そして （3)、(4) は文化の進展に伴い、今後、ますます子どもの成長発達にとって、貧困な社会状況が予想されるので、特別な取り組みが必要となる側面である。このことから言えることは、おとなの強い意識改革が、今後必要となってくる。まさしく子育てに関しては、種々の施策が飛び交っている時代でもあるが、子どもと一緒に親も頑張れる環境や社会の仕組みが必要である。

おわりに

今回、幼稚園児を対象に、からだに関する絵本の読み聞かせの反応を中心に、幼児が知っている「からだ」の概要をまとめることができた。５歳の幼児たちは、からだの部分の名称や働きについて知り始めた時期であり、抵抗なく受け入れられ、絵本を楽しく見聞きすることができた。実際には幼稚園で、からだに関する内容を取り入れていることもあり、幼児たちはからだの不思議さに目を輝かせながら、知識のための知識でなく、からだを愛するツールの一つとして、絵本が活用されるのではないか、ということが示唆された。

子どもの世界における様々なからだとの出会いを、できるだけ活用して有効にしたいというのが、この論文を書くのにあたっての気持ちであった。将来、自分のからだは自分で、健康を保持増進し、管理していけるようにしたいと願うものである。

最後に、調査にご協力いただきました園児の皆様、先生方に深謝申し上げます。

参考資料　絵本『からだっていいな』を読んだ大学生の感想

学生	記　述　内　容 （絵本の関連頁＝全体9人、５頁5人、８頁3人、14頁1人、計18人）	関連頁
A	体があるからこそ感じとれるものなのだ。自分のからだを大切にしようと思った。人間だからこそのからだで、しかも、自分だけのからだであるから、日々幸せだと思うべきだ。	全体
B	いつも普通に感じることを言葉ではっきり表現していたのが、心に残った。体について教えるとき、この本を使えば役に立ち、子どもだけでなくおとなでも楽しめる。また、子どもによりよく教えられると思う。	全体
C	いろいろな表現があって面白かった。例えば、「おなら」とか、そういう恥ずかしがらずに書いてあった。そこも面白いと思ったし、その中で愛なども感じられる表現もいっぱいあって、子どもにとってすごいいい本だと思った。	5
D	「おなら」とか嫌だと思うし、からだに対して嫌だな・困るなと思うことが沢山あるけれど、この本を読んで、お父さんのおならはホルン、お兄ちゃんはトランペット、私は草笛など楽器にたとえて表しているので、からだって面白いと思った。良いことと悪いことを含め、からだっていいなと思えるようになった。	5
E	からだを動かす楽しさや面白さが伝わってくる絵本だ。誰かになでてもらうとうれしくなるなど、他人との関わりあいも感じられる絵本だった。からだがあるといいなって思えること、単純だけど分かりやすく説明してあって、子どもでも分かりやすいなって思った。	8
F	からだについて、子どもも楽しく聞いていられる本なので、分かりやすく言われたらそうだなと思えた。自分でくすぐってもなんともないけれど、他人にくすぐられるとくすぐったいのは、なんだろうねと思えた。自分では分からないことは、他の人によって感じたりしていくものなのかと思えた。	8
G	体にはいろんな機能がついていて面白い。例えば、痛かったり・かゆかったり・寒かったりして、感じ方はさまざまでいろんなことができる。もっと新しい発見もしたいなと思った。	14

〈注〉

1）「からだ」とした理由について

一般的に「身体」といえば反射的に「精神」も想起したくなる用語でもある。江河［39］は、「『からだ』といえば、我々がふだん意識しているより、はるかに『こころ』に近いものであり、また逆に我々が日頃心と呼んでいるものは意外なほど『からだ』に近いものがある」と述べているように区別ができにくい。ここでは身体という用語ではなく、あえて「からだ」とする。また、子どもの理解が、心と身体の分離やつながりを区分することが難しいこと、子ども自身がからだに対するイメージをどのようにもっているか不明なためである。

引用文献

［１］柳田邦男『砂漠でみつけた一冊の絵本』岩波書店、2008年、ｐ.15.
［２］佐々木宏子『絵本の心理学』新曜社、2002年、ｐ.18.
［３］http://www.kodomo.gr.jp/sagasu/saga38.html「からだの絵本」日本児童図書出版会.
［４］かこ さとし『かこさとしのからだの本』童心社、1976年.
［５］レオ・バスカーリア、島田光雄絵、みらいなな訳『葉っぱのフレディーいのちのたびー』童話屋、1998年.
［６］スーザン・バーレイ、小川仁央訳、『わすれられないおくりもの』評論社、1986年.
［７］アーサー・ビナード、長野仁監『はらのなかのはらっぱ』フレーベル館、2006年.
［８］瀬田貞二『絵本論』福音館書店、1985年.
［９］マーガレッド・ミーク著、こだまともこ訳『読む力を育てるーマーガレット・ミークの読書教育論』柏書房、2003年.
［10］ヴィクター・ワトソン＆モラグ・スタイルズ、谷本誠剛訳『子どもはどのように絵本を読むのか』柏書房、2002年.
［11］河合隼雄・松居直・柳田邦男『絵本の力』岩波書店、2001年.
［12］松谷美和子、菱沼典子他「５歳児向け『からだを知ろう』健康教育プログラム、消化器系の評価」聖路加看護大学紀要、No.33、2007年、ｐ.54.
［13］菱沼典子他「『自分のからだを知ろう』プログラム作製：市民主導の健康創りをめざした研究の過程」聖路加看護大学紀要、No.32、2005年、pp.51-58.
［14］山本直英・片山健作『からだっていいな』堂心社、2008年.
［15］ヘルメ・ハイネ作、天沼春樹訳『きみがしらないひみつの三人』徳間書店、2007年.
［16］無藤　隆「身体知の獲得としての保育」保育学研究、第34巻、第２号、1996年、ｐ.9.
［17］ヴィクター・ワトソン＆モラグ・スタイルズ、谷本誠剛訳『子どもはどのように絵本を読むのか』柏書房、2002年、ｐ.15.
［18］大築立志『手の日本人、足の西欧人』徳間書店、1989年.
［19］寺沢宏次『子どもの脳は蝕まれている』星雲社、2006年、ｐ.11.
［20］小松崎進、大西紀子『この絵本を読んだら』高文研、2000年、ｐ.42.
［21］前掲書［17］ｐ.18.
［22］松居直『絵本のよろこび』日本放送協会、2003年、ｐ.448.
［23］前掲書［20］ｐ.9.
［24］前掲書［８］pp.74-75.
［25］宮地敏子『絵本・児童文学における老人像』グランまま社、1999年、ｐ.111.
［26］田島征三『しばてん』偕成社、1971年.
［27］時実利彦『人間であること』岩波新書、1970年、p.139.
［28］ミネルヴァ書房編集部編『保育所保育指針、幼稚園教育要領―解説とポイントー』、2000年、pp.246～247.
［29］『小学校学習指導要領解説』文部科学省、1999年.
［30］前掲書［19］ｐ.７.
［31］前掲書［22］ｐ.430.
［32］「本がつくるコミュニケーション」東京新聞、2007年3月28日、朝刊。
［33］前掲書［１］ｐ.154.
［34］松岡享子『えほんのせかい こどものせかい』日本エディースクール出版部、1987年、ｐ.29.
［35］正高信男『父親力』中央新書、2002年、pp.２-６.
［36］小林功、高柳恭子他「しなやかな心と体の育成をめざして」宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、第30号、2007年、ｐ.248.
［37］ルソー、今野一雄訳『エミール(上)』岩波文庫、1962年、ｐ.270.
［38］正木健夫『子どものからだづくり』全国社会福祉協議会、1984年、ｐ.26.
［39］江河徹『「身体」のイメージーイギリス文学からの試みー』ミネルヴァ書房、1991年、ｐ.ｉ.

参考文献

・古市久子「健康を目ざす環境の工夫」、『子どもの健康』三晃書房、1996年.
・Mave Salter、前川厚子訳『ボディ・イメージと看護』医学書院、1992年.
・渡辺順子『ことばの喜び・絵本の力』萌文社、2008年.
・モーリス・センダック、脇明子・島多代訳『センダックの絵本論』岩波書店、1990年.
・西村健『頭が良くなる絵本の読み方』講談社、2004年.
・松岡享子『昔話絵本を考える』日本エディタースクール出版部、2002年.
・鳥越信編『日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房、2002年.
・内田樹・三砂ちづる『身体知―身体が教えてくれること』バジリコ株式会社、2006年.

共同研究者
八幡　博繁　（貴船幼稚園園長）
加藤　敦子　（貴船幼稚園教諭）
山崎明日香　（貴船幼稚園教諭）

受理日　平成21年９月30日